

コロナ禍における母性看護の在り方

日本母性看護学会 理事長 鈴木 幸子 (埼玉県立大学)

臨床や教育機関の学会会員の皆様におかれましては、連日、先の見えないコロナに対する対応に追われていることと存じます。母性看護に関連する事項では、妊婦が重症化しやすいこと、外出自粛や登校自粛によりDV被害が見えにくくなっている点なども問題視されています。

しかし、私が興味深く感じているのは新型コロナウイルスの感染経路が飛沫であることからマスクが重要視され、売り切れ騒ぎが起きているくらいなのだから、この際Sefer Sexの基本アイテムとしてのコンドームがもっと普及しても良いのではないかということです。以前に自分が参画して作った性感染症予防のDVD教材ではコンドームを外すときに手にどのくらい精液がついてしまうのか、蛍光塗料入り模擬精液とブラックライトによる実演で示した動画を付けました。精子は病原体ではないですが、体液

は感染源なので手が触れないようにティッシュで始末し、その後手洗いをしてから次の所作に移ることを奨励した動画です。感染しても無症状が多いところも性感染症はコロナと似ているので、性感染症の検査を受けることとコンドームをいつもつけることがもっと注目されてもよさそうだと思います。

一緒に生活する、いや15分以上近くにいただけで濃厚接触という世の中で、家族や親子、愛する人同士は限りなく病原体をやり取りしているというというのが普通の生活というものでしょう。「よいふれあい」「わるいふれあい」について、子どもだけでなく、大人も学びなおし、有益な微生物たちとの共生をしつつ、身を守る術を獲得するための母性看護学でありたいものです。

コロナ禍における臨床現場 ウィズコロナの時期こそ、オンライン産後フォローを！

長坂 桂子 (NTT 東日本関東病院)

今思えば貴重な経験でした。普段は、ずっと一部署にいる働き方ではないのですが、2020年4月～7月の4か月間は、連日産婦人科外来を担当し、CNSの機能をフル活用しました。この時

期、妊産褥婦のリスクが増すことが予想されたので、先回りし、「一人も取り残さない」をミッションとし、チームで7つの新ケアサービスを構築しました。「よいことはすぐやろうか」と

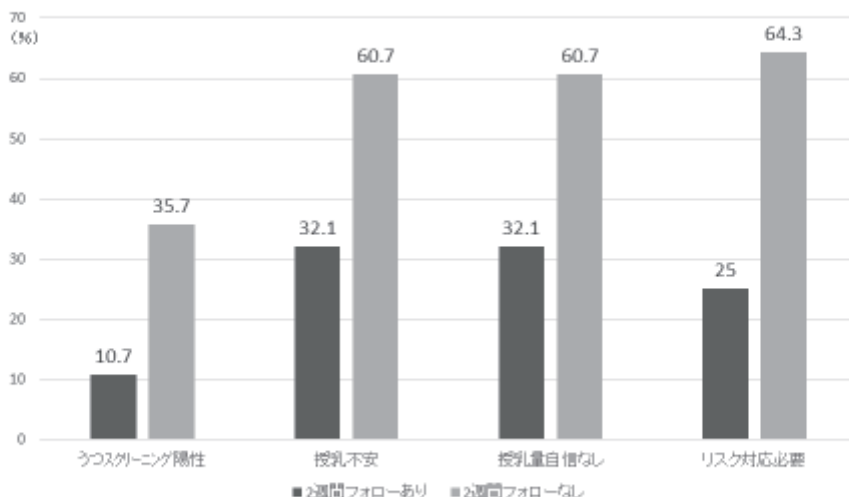
いって体を動かすベテラン助産師・看護師のチームワークの賜物です。

4月から開始した「オンライン産後フォロー」は、産後2週間頃の褥婦全員が、自宅にいながら、電話もしくはテレビ会議システムを用いて、助産師と話し・スクリーニングを受けられる15分程度の遠隔ケアです。産婦健診の内容をほぼ網羅しており、3年目以上の助産師が担当します。フォローを受けた方からは、「安心した」「不安が解消した」との声が聞かれました。図の黒色軸は、このフォローを受けた群（N=28）の1か月健診時の状態を表しています。Whooleyうつスクリーニング陽性者は10.7%に抑えられ、時間をとり対応することが必要なケースは25%

でした。ところが、不本意にもこのフォローが中止される事態が生じました。図の灰色軸は、フォロー未実施群（N=28）の1か月健診時の状態です。うつスクリーニング陽性者は35.7%と3倍以上に増加し、授乳の不安も約2倍、時間をとり対応するケースも2.5倍に増加し、スタッフは疲弊しました。意図せず、オンラインフォローの効果が目に見える形となり、スタッフの強い希望でオンラインフォローは再開し、継続しています。

ウィズコロナの時期の、オンラインフォローは、褥婦の安心につながる満足度の高いケアです。導入は簡単です。ぜひご検討ください！

オンライン産後2週間フォローがなかったら、抑うつが増えた！



フォローあり (N=28) 平均32.7歳、初産婦53.5%、7月
フォローなし (N=28) 平均33.6歳、初産婦60.7%、8月

第51回日本看護学会@WEB シンポジウムで発表予定

コロナ禍における研究現場 新型コロナウイルスと研究への影響

齋藤 いずみ (神戸大学大学院)

所属する神戸大学保健学研究科、助産師コースの修士の研究に関連する状況を中心に、お話しさせていただきます。

3月末の教授会で4月6日から保健学科(学部)、

保健学研究科(大学院)の全講義・演習は、遠隔講義・演習に移行が決まり、ソフトの種類はZOOMとなりました。

学生も教員も準備を行い、4月6日から一斉に、

遠隔講義が開始されました。

神戸大学のコロナウイルス感染拡大防止のための活動指針が設定されました。大学機能のほぼすべてを原則停止させるが最高レベルの5、研究活動として、研究を中止することにより重大な研究の損失を被る場合のみ、ごく一部の許可されたメンバーが交代制で、短時間、大学構内に立ち入ることを許可するという内容がレベル4です。4月5月はレベル4と決定されました。3月末までに、修士論文計画書に対する倫理審査の許可は出ていましたが、上記条件のため、4月5月に新たな研究開始は不可能でした。

いつ研究の開始ができるか、見通しが立たず院生はかなり不安な状態になりました。これらの状況を救うために以下の工夫がなされました。昨年秋に、研究概要について担当教員が臨床側と交渉し内諾を得、関係性の良好な病院との調整事例を御紹介します。臨床側でも、4月から遠隔会議が推奨され、臨床と大学側と遠隔会議が可能であることが分かりました。事前準備をして、院生からの研究のプレゼンテーションを遠隔会議システムで開催しました。病院の

ソフトはチームス。一番早い時期に対応くださった病院との会議は5月11日でした。打合せを病院と実施できたことで、院生の精神的な負担は軽減された面があります。これ以降、病院との調整会議の方法に、遠隔会議システムが他の病院間とも使われるようになった点は、今後の実習調整や研究の調整では、前進できた部分です。実際の研究が開始されたのは7月または8月に入ってからです。

母性・助産分野の共同研究としては、全国の工学系の研究者・看護系研究者・他分野の研究者との総勢約十数名の研究会が、5月以降遠隔会議が毎月1回開催でき、継続的な意見交換の場が、実現できるようになったことは、思いがけない大きなプラス面です。

コロナ禍の状況で、大きなマイナス面としては、病棟で直接患者さんとコンタクトを取るタイプの研究には、今後もかなりの影響が出る可能性があり、これまで以上に研究の実現性が問われる面が多くなった事が、看護の研究としての難しさです。

コロナ禍における教育現場 教育と新型コロナウイルス

北川 良子（千葉県立保健医療大学）

この度、上記タイトルで執筆の依頼をいただきました。思えば2月の母性看護学実習中からじわじわと影響が出始め、3月に実施される最初の助産学実習では、施設から実習中止の連絡がありました。今でもその施設では実習再開は厳しい状況が継続しています。この半年間、色々なことが二転三転し、慣れない遠隔授業や動画撮影等、戸惑いを抱えながらも前期の授業が終了しました。授業準備は毎回自転車操業で反省ばかりですが、振り返ってみると学生は限られた学習環境の中でも多くのことを学び成長している姿がありました。そこでこの半年の教育について振り返りたいと思います。

本学ではMicrosoft社のTeamsを用い5月から

遠隔授業が開始されました。講義はPowerPointによる動画を作成の上、オンデマンド方式で配信し、7月からは少人数で対面授業も再開されました。演習時のデモンストレーションは、以前は学生の前で教員が実施しておりましたが、3密を避けるために産褥のフィジカルアセスメントや分娩介助技術など、動画を撮影し事前に配信しました。学生はデモンストレーションの動画を視聴した上で、実習室に少人数毎に参集し技術演習を行いました。学生は概ね事前・事後学習にも真面目に取りくんでいる様子が伺え、遠隔授業であっても工夫を行えば、到達目標を達成することは可能であると実感しています。母性看護学実習はすべて学内実習となり、

模擬褥婦となりうる助産師を特別講師にお呼びし、臨地実習さながらの学内実習を実施しました。学生はすでに多くの領域別実習を経験してきたということもありの到達度も遜色ないと考えております。しかし学生は臨地実習において、母性看護の対象者である母子やその家族との直接的な関わりから多くのことを感じ、体験を通して成長します。今回、臨地に行くことができなかった学生も臨地で実習を行うことができれば、より多くの学びが得られたと考えたと申し訳ない気持ちになります。

助産の履修者は少人数であるため、4月から

遠隔リアルタイムで助産診断・助産計画の演習を行いました。産婦ケアのOSCEなどは7月以降に時期を変更することで、概ね例年通りの教育を行うことができましたが、前述のとおり一部の学生が臨地実習を開始できていない状況でした。対象者の安全確保のために医療現場は多忙を極めるなか、急遽お引き受けくださる施設において10月から実習を行うことが本日決まりました。本当に有難いことです。母子とその家族のために学生が能力を十分発揮できるように教員としてサポートしていきたいと考えています。



第22回日本母性看護学会学術集会報告 第22回日本母性看護学会学術集会を終えて

第22回学術集会長 島袋 香子（北里大学）

第22回日本母性看護学会学術集会は、2020年6月28日（日）「母性を支える看護力—叡智を実践へ—」をメインテーマとし、北里大学白金キャンパスにおいて開催する予定で準備を進めておりましたが、新型コロナウイルス感染症の流行により会場開催が行えない状況となり、急遽Web開催に変更いたしました。Web開催の期間は、参加者の都合に合わせて視聴できるよう7月3日（金）～7月16日（木）の2週間としましたが、おかげさまで、954名と多くの方々にご参加いただきました。

今回の学術集会では、複雑な様相を示す母性を取り巻く課題に対し、母性看護を専門とする看護職で、看護力の発揮について考えたいと思い、メインテーマを設定いたしました。

教育講演Ⅰでは、小林保子先生（鎌倉女子大

学児童学児童学科教授）に、現代母親像に関し、重症心身障害児家族のQOL支援から見えてきたものについてご講演いただきました。教育講演Ⅱでは、山口創先生（桜美林大学リベラルアーツ学群教授）に母子の愛着に重要であるタッチングとオキシトシンの関連についてご講演いただきました。特別講演は、小田口浩先生（北里大学東洋医学研究所所長）に、女性の健康支援に漢方医学を活用することのご講演をしていただきました。特別企画として母子の健康と子育てを応援するコミュニティー作りについて、北海道大学COI「食と健康の達人」拠点プロジェクトメンバーの吉野正則先生（日立製作所シニアプロジェクトマネージャー）、玉腰暁子先生（北海道大学医学研究院教授）に講演いただきました。高度実践看護師育成支援委員会主催の

セミナーとして、長坂桂子先生（母性専門看護師）、小澤桂子先生（がん看護専門看護師）、近藤一成先生に、お母さんに伝えたい子宮がん予防について、講演いただきました。また、CLOCMiPに対応するセミナーとして、本学会理事の成田伸先生（自治医科大学看護学部教授）に周産期の代謝異常の考え方と対応について、教育セミナーをしていただきました。さらに、一般演題には50題がエントリーされました。

予定していた講演やシンポジウム、企画セミナー等は、プログラム通りWeb参加いただきましたが、一般演題は抄録による紹介のみとなり、シンポジウムにおける討議や一般演題における質疑等を行えるまで設定できず、残念に思っております。学会集會事務局は初めての経験であり、精一杯であったことをご理解いただきたく、お願い申し上げます。

参加者のアンケートから、「遠くからでも参加できる」「自分の時間で参加できる」「全ての講演に参加できた」「何度でも繰り返し視聴でき、理解が深まる」等、Web開催ならではのメリットがあることが提示されましたが、「討議を聞

きたい」「質疑をしたい」と、対面での開催を希望する声も多くありました。今回の経験を次の学会集會事務局に引き継ぎ、学会開催の方法をブラッシュアップできるよう協力していきたいと思っております。学会運営において学会集會事務局は、Web開催のための業者選定から、何をどのように設定できるのか、業者の方と共に試行錯誤しながら検討を重ねて開催準備を致しましたが、不手際も有り、ご迷惑をおかけした皆様には、心よりお詫び申し上げます。

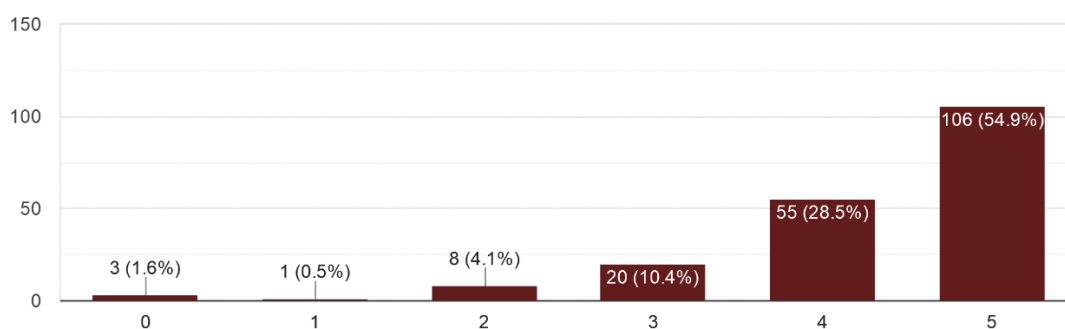
今回の学会集會は、本当に多くの方々の協力を得て、無事開催することが出来ました。講演録画を快く承諾してくださった講師の皆様、査読者の皆様、運営委員・実行委員の皆様、学会集會の開催にご尽力いただきました全ての皆様に、深く御礼申し上げます。また、慣れぬコンピューター操作に挑戦し、Web学会にご参加下さいました皆様に心より感謝申し上げます。

【アンケート結果】

0→5満足度が高くなる

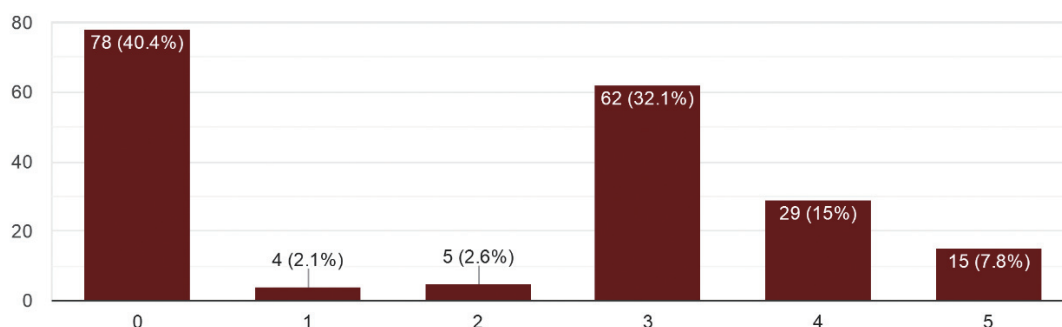
Web学会への開催方法の変更についてはいかがでしょうか。

193件の回答



【口演発表】：抄録発表

193件の回答



第23回日本母性看護学会学術集会のご案内

第23回学術集会長 石井 邦子（千葉県立保健医療大学）

2021年5月22日及び6月1日～30日に、第23回日本母性看護学会学術集会を開催します。テーマは「次代へと命をつなぐ確かなケア—新たな社会生活への挑戦—」です。妊娠・出産・育児の支援が家族から地域社会へと移り、医療従事者には場を超えた連携による継続ケアの提供や、ICT・AIとの共存が求められるようになりました。そして今、新型コロナウイルス感染症が、私たちの日常生活、人と人との繋がり、家族のありようを一変させようとしています。新たな社会生活において、次代へと命をつなぐ営みがどのように変化するのか、その営みを支える確かなケアとは何なのかを、追求したいと考えております。

本学術集会では、これからの学術集会の在り方も模索してまいります。5月22日には、会長講演、特別講演、鼎談、シンポジウムを幕張メッセで行い、ライブ配信をします。特別講演は、周産期医療や母子保健領域のコクランレビューでご高名な大田えりか先生をお招きしました。鼎談では、ウイメンズヘルス領域の高度看護実践の未来像について、シンポジウムでは、新たな社会生活におけるケアの変革と継承について、ご登壇者と参加者の皆様との討議により、深めてまいりたいと考えております。参加者の皆様には、会場からのご発言に加え、WEBからチャットで加わっていただくというコミュニケーションを計画しています。

6月1日から30日まで、事前収録した教育講演と一般演題（研究報告・実践報告）を、会場開催の収録と共にオンデマンド配信をします。教育講演は、「新しい社会生活におけるステップアップ・ケア」と題し、周産期メンタルヘルス、女性への暴力、助産師現任教育、常位胎盤早期剥離ケアを取り上げました。いずれも、CLOCMiP®レベルⅢ認証申請に利用可能な研修です。一般演題は、演者がパワーポイントの動画をyou tube で配信し、参加者とコメントに

よる討議を行います。優秀賞の表彰も行います。ご発表くださる皆様の日ごろの研究成果と実践成果をご披露いただき、参加者の皆様と有意義な情報共有ができる環境を準備しています。

社会の大きな転換期に開催される学術集会の使命は何か、これこそが「新たな社会生活への挑戦」と言えるかもしれません。会場とWEBのハイブリッド開催のメリットを探りながら、これまでできなかったことに果敢にチャレンジしていきたいと思っております。全国から、たくさんの皆様が、幕張メッセにそしてWEB上にご参加くださることを、企画委員一同、心よりお待ちしております。

学術集会事務局

千葉県立保健医療大学内

E-mail secretariat@jsmn23.jp

学術集会HP <https://www.jsmn23.jp/>

第23回 The 23rd Annual Conference of Japan Society of Maternity Nursing
日本母性看護学会学術集会

次代へと命をつなぐ確かなケア
—新たな社会生活への挑戦—

2021年5月22日 幕張メッセ国際会議場 ライブ配信
2021年6月1日 オンデマンド配信

石井 邦子 (千葉県立保健医療大学)

特別講演 ニューノーマル時代に看護職に求められる力
大田 えりか (聖路加国際大学)

教育講演 新しい社会生活におけるステップアップ・ケア
・周産期メンタルヘルスクアの展望と看護職への期待
渡邊 博幸 (特定医療法人学術会木村病院)
・女性への暴力がもたらす影響
中島 幸子 (NPO 法人レジーエンス)
・助産師現任教育における成人学習論と経験学習の活用
鈴木 康美 (埼玉県立大学保健医療福祉学部)
・再発防止の視点から診る常位胎盤早期剥離のケア再考
鈴木 真 (医療法人救風堂豊田総合病院)

鼎談 日本看護協会長と語る ウイメンズヘルス領域の高度看護実践の未来像

シンポジウム 新たな社会生活における命をつなぐ確かなケア—その変革と継承—

演題募集期間 2020年12月7日 2021年2月12日
事前参加登録 2020年12月7日 2021年4月10日

学術集会事務局
千葉県立保健医療大学 健康科学部看護学科内
〒261-0014 千葉県千葉市美浜区若葉二丁目10番1号
E-mail: secretariat@jsmn23.jp
第23回学術集会公式サイト
URL: <https://www.jsmn23.jp/>

在宅妊娠糖尿病患者指導管理料が産後に拡大！

～助産師外来での診療報酬獲得を目指して～

看護政策検討委員会担当理事 成田 伸（自治医科大学）



2020年4月、妊娠中のみ対象となっていた「在宅妊娠糖尿病患者指導管理料」が産後12週までに拡大されました。これは、本学会看護政策検討委員会が、日本助産学会、日本糖尿病教育・看護学会等と協働して申請したもので、活動の成果としてうれしい限りです。本稿では、診療報酬の仕組みと助産師としての関わり方について紹介していきたいと思えます。

「在宅妊娠糖尿病患者指導管理料」の算定の対象になるのは、周産期の糖代謝異常状態にある妊婦で、1型糖尿病（以下DM）や2型DMの妊婦も含まれます。一方で妊娠糖尿病（以下GDM）が全員含まれるかというところではなく、GDM妊婦のうちでも、診断基準に2点以上該当しているか、あるいは非妊時BMI 25以上の肥満妊婦、いわゆるハイリスクGDMに限られています。ハイリスクGDMの規定が入ったのも2015年の改定で、GDM妊婦の管理において血糖コントロールの重要性が認識された結果です。

また「在宅妊娠糖尿病患者指導管理料」自体は指導にあたる専門職が限定されていませんが、この対象者については、医師の指示があれば、月1回「在宅療養指導料」を算定できます。「在宅療養指導料」は、指導にあたる職種が保健師、助産師又は看護師と限定されており、個室で30分以上指導し、診療録に記録することとされています。この指導者に「助産師」が関わったのも2018年の改定であり、ごく最近のことなのです。この複雑な診療報酬の仕組みについては、現在委員会で手引きを作成中です。

GDM既往女性はそうでない褥婦と比較して、将来2型DMを発症するリスクが7.43倍です。最近ではアジア系の日本人はその発症リスクはより高いとのエビデンスも出てきています。しかし、GDM既往女性は産後急速に糖代謝異常状態が改善するため、保険診療上支援の対象には

入っておらず、フォローアップの重要性は言われるものの、支援は継続していませんでした。GDM既往女性については、産後のできるだけ密度濃い母乳育児や非妊時体重への早期復帰が、この2型DM発症リスクを下げる、あるいは発症時期を遅らせるとのエビデンスも加わっています。これらエビデンスの積み重ねに加え、本学会看護政策検討委員会を中心に、他学会と協働で働きかけた成果として、ようやく「在宅妊娠糖尿病患者指導管理料」を産後12週までに1回算定することが可能となったのです。小さな小さな変化とも言えますが、GDM妊婦、GDM既往女性には、助産師の支援が必要なんだと社会に認知が徐々に進んできている成果ともいえます。

私は、生涯学習支援委員会GDMセミナー部会も担当し、「糖代謝異常妊産褥婦への看護支援セミナー」を開催してきました。2016年に初めて大阪で開催した頃は、GDM妊婦への助産師の関わりは薄く、GDM既往女性たちは、大変な血糖コントロールは妊娠中だけとの認識が強い状況でした。セミナーに加え、学術集会での教育講演も担当し注意喚起してきました。5年経過し、7.43倍のリスク認識も根付き、助産師の関心も高まってきたことを実感します。

一方で、ハイリスクGDMに該当しないGDM妊婦はこの在宅妊娠糖尿病患者指導管理料算定の対象から外れています。また「在宅療養指導料」であっても170点に過ぎず、多くは内科で糖尿病看護認定看護師が自己血糖測定や療養の指導をするので精いっぱい状況です。GDM妊婦全員に適切な支援がいくシステムにはなっていないのです。

「在宅妊娠糖尿病患者指導管理料」の産後への拡大は、助産師に対するエールといえます。助産師は、助産師外来で、フィジカルアセスメント、超音波検査、丁寧な聞き取り等、自ら得

た情報に基づいて、妊婦・褥婦を支援することを確立してきました。対象者は当初ローリスクに限定されていましたが、最近ではリスクを持つ妊婦にも拡大しています。これからは、糖代謝異常妊産褥婦たちへの妊娠期から継続した支援を、ぜひ助産師外来で実施して欲しいと思います。また、助産師の継続教育がウイメンズヘルスケアの方向に拡大されつつあります。糖代謝異常をかかえて子育てする1型・2型

DMの女性たち、GDM既往女性たちへの長期的な健康支援を、助産師外来で、やがてはウイメンズヘルス外来で…夢は大きく膨らみます。その夢の実現に向けて、多くの助産師の関心がこちらに向いてくれるようにと日々頑張っています。

さて、今年のGDMセミナーはZOOM開催です。11月開催分はまだ間に合います。みなさまの参加をお待ちしています。



各委員会からのお知らせ

1. 編集委員会より

—学会誌オンライン化その後—

2019年7月より、随時オンライン投稿査読システムを導入し、冊子体の発刊から電子ジャーナルでの発刊といたしました。昨年度は残念ながら投稿数が少なく終わってしまいましたが、昨年度発刊した論文に関しては、J-STAGEですでに、2000以上のアクセスがあるようです。電子ジャーナル化したことで、広く皆様にご確認いただけているのではないかと自負しております。また、今春に入りましてから、投稿数も徐々に増えてきており、4月までに投稿いただいた3編でニュースレター発刊とほぼ同時期となる10月初旬に21巻1号を発刊いたします。3月発刊予定の2号に向けても、査読および論文修正が進んでおります。さらに投稿論文数が増えれば、年3回以上の発刊も可能なように準備しておりますので、多くの投稿をお待ち申し上げます。一方、投稿される論文がどうしても文字数が超過するものが見受けられるようになりました。査読意見により加筆することも影響しておりますが、かなり大きい図表が含まれている

にもかかわらず、著者はその文字数カウントを過小評価していることがあります。今後、制限文字数を中心として、投稿規程の見直しも検討しておりますが、無制限ではございません。質的研究など制限文字数内にまとめることは困難であることは同じ研究者として十分承知しておりますが、読者のためにも端的な表現を心掛け短くまとめること、また、図表はできる限りシンプルに最小限にして論文化されることをお願い申し上げます。

2. 研究・学術支援委員会学術支援部会より セミナー開催のお知らせ

日本母性看護学会セミナー「周産期の倫理と看護」—国際的な視点から周産期における倫理的課題と看護を理解する—

令和3年3月13日（土）14：00～15：40

インターネット配信研修（ライブ）

参加費（会員）無料、（非会員）3,000円

事前予約が必要です。（HPでお知らせいたします）

【CLOCMiP®レベルⅢ認証申請に活用できる研修、周産期の倫理と看護（承認番号S02-20-08-0016）】です。

3. 高度実践看護師育成支援委員会

高度実践看護師育成支援委員会では、臨床現場において複雑で解決困難な看護課題を持つ女性や家族のための専門家として活躍する母性看護専門看護師（CNS）の活動を、具体的に分かり易く紹介するため、本学会ホームページに

「母性看護専門看護師紹介ページ」を開設します。

2020年11月2日（月）公開を予定しております。会員の皆様には本ページを活用して母性看護専門看護師の認知度を高めていただきますようご協力お願い致します。



事務局からのお知らせ

1. 2020年度一般社団法人日本母性看護学会総会報告について

第22回学術集会時に開催を予定しておりました総会は新型コロナウイルスの影響により、「非参集型の書面評決による総会」を開催し、社員の皆様に書面にて決議事項をお諮りしました。詳細については、学会ホームページに掲載された議事録（7.15掲載）をご参照ください。

2. 2019年度理事会について

理事会は通常理事会3回（対面2回、Web1回）、

書面理事会は6回開催されました。

3. 第23回日本母性看護学会学術集会のご案内

2021年5月22日（土）石井邦子学術集会長（千葉県立保健医療大学）のもと、第23回日本母性看護学会学術集会を開催いたします。ハイブリッド開催とし、「幕張メッセ国際会議場／WEBでのライブ配信」、併せてオンデマンド配信（6月）を予定しております。皆様のご参加をお待ちしております。尚、詳細は近く公開予定のHPをご参照ください。

4. 会員のみなさまへのお願い

1) 2020年度会費の支払い

本学会は皆様の会費で運営されております。2020年度会費未納の方は、事務局よりお送りしている郵便振替用紙（青色払込取扱票）を用いるか、あるいは下記の口座番号へ会費の納入をお願いします。

年会費：8,000円

① 郵便振り込みの場合（青色振込取扱票）

口座番号：00120-8-386309 加入者名：一般社団法人日本母性看護学会

② 銀行振込の場合

ゆうちょ銀行 ○一九店 当座 0386309

2) 会員情報登録システム（SOLTI）への情報更新のお願い

ご連絡先・ご所属先等が変更される会員の皆様は、本システムより情報更新をお願いいたします。またEメールアドレスを登録されていない会員の方には、ぜひEメールアドレスの登録をお願いいたします。

また、本学会は、日本学術会議協力団体加盟の準備を進めております。そのため、会員の半数以上が大学教員等の研究者であることが条件となっております。つきましては、会員の皆様には、学会ホームページ (<http://bosei.org/index.html>) の「会員情報照会・更新」バナーから、ご自身の会員ID（会員番号）とパスワードを使って会員情報管理システム＜SOLTI＞ログインしていただき、ご自身で登録情報の修正・追加をしていただきますようお願いいたします。特に、ご所属・役職・性別につきましては、入力漏れのないようにご確認・修正をお願いしたいと存じます。ご多用かと存じますが、入力にご協力いただきますようお願いいたします。なお、オンラインでの修正が難しい場合には、FAXまたはE-mailにて、事務局あてご連絡ください。

学会公式ホームページ【会員情報照会・更新】

会員ID（会員番号）とパスワードを入力の上、ログインしてください。

事務局（会員窓口）

一般社団法人日本母性看護学会事務局

（株）ガリレオ学会業務情報化センター内

〒170-0002 東京都豊島区巢鴨1-24-1-4F

TEL：03-5981-9824 FAX：03-5981-9852

E-mail g031jsmn-support@ml.gakkai.ne.jp

学会HP <http://bosei.org/index.html>

編集後記

今回のニュースレターの発行は、例年よりも遅くなり、大変申し訳ありませんでした。今年は2020年と東京オリンピックの年の予定でしたが、年明けからCOVID-19による影響が思いがけず大きいものとなりました。これまでの日常や常識が覆されることが多く、様々な困難に直面し、変革を迫られ、皆様においてもそれぞれの置かれている立場で、ご苦勞をされたことと思います。そこで母性看護の領域におけるCOVID-19の影響をそれぞれの立場でご紹介いただきました。これからのニューノーマルにおける母性看護のありかたについて考える機会になっていただければと思います。皆様の方からも本学会のサポートを必要とすることがあれば遠慮なくご意見をお寄せいただければと思います。

（文責 広報担当理事 中村康香）



発行人：鈴木 幸子
発行日：2020年10月31日
広報担当：齋藤いずみ、中村康香
発行：一般社団法人日本母性看護学会
〒170-0002 東京都豊島区巢鴨1-24-1-4階
株式会社ガリレオ
学会業務情報化センター内
一般社団法人日本母性看護学会事務局
Tel：03-5981-9824 Fax：03-5981-9852
E-mail：g031jsmn-mng@ml.gakkai.ne.jp